

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530780
 研究課題名（和文） 現職教員再教育における批判的読解力（及びその指導力）速成のためのカリキュラム開発
 研究課題名（英文） Curriculum Development for a Intensive Course in Critical Reading (and in Teaching Skills for it) in Teacher' s Retraining
 研究代表者
 香西 秀信 (KOZAI HIDENOBU)
 宇都宮大学・教育学部・教授
 研究者番号：20178213

研究成果の概要：本研究の主要な成果は、以下の二点に分けられる。

- 1) 上記研究課題に係る教員講習用テキストの作成。これは、教員自身の批判的読解力を訓練するためのものと、生徒の批判的読解力を訓練するためのものとの二種類を準備した。
- 2) 研究成果を広く社会に発信するため、研究内容を平易に書き直し、一般書（新書）としてまとめた。（現在、刊行準備中である。）

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：批判的読解力、批判的思考、非形式論理学、虚偽論、レトリック、現職教員再教育、教員養成

1. 研究開始当初の背景

すでに「教育課程審議会答申」等でも指摘されているように、児童・生徒の論理的思考力を高めることは、新しい国語教育に求められている重要な使命の一つとなっている。しかしながら、教員養成における実際のカリキュラムは、従来どおり国語学、国文学の学問的枠組みにもとづいており、将来、小学校、中学校、高等学校で論理的思考の指導をするはずの国語教員志望者自身の論理的思考力については、それを訓練するための科目はほとんど開かれておらず、またそのための基礎研究もはなはだ遅れているのが現状である。研究代表者は、こうした認識に立ち、平成 1

5・16 年度、平成 17・18 年度の 2 度にわたって科学研究費の交付を受け、現職教員再教育及び教員養成課程での、論理的思考力、論理的表現力育成のための訓練カリキュラムの開発に取り組んだ。

しかしながら、研究を進めるうえで、以下の新たな問題が浮かび上がった。

1) 現職教員に対する、論理的思考力、論理的表現力の訓練及びその教科書は好評であったが、教員にその種のがついても、それを教室の生徒にどのように指導するかについては方法上の混乱が見られ、やはり生徒指導用のカリキュラムも同時に作成してほしいという要望が数多く寄せられた。こうし

たことから、上記平成17・18年度の研究では、内容を一部修正し、現職教員の協力の下、教師の訓練カリキュラムのみならず、小学校・中学校・高等学校での（論理的思考）訓練カリキュラムの開発を行った。

2) 上記二つの研究で対象にしたのは、自ら論理的に思考し、表現する力である。だが、われわれの知的活動の多くは、他者の書いたものを読むことに費やされる。したがって、表現のための論理的思考だけでなく、読解のための論理的思考もまた訓練されなければならない。もちろん、これらは互いに独立したのではなく、表現のための論理的思考力は読解のための論理的思考力に十分応用が可能であるが、訓練の効果をあげるためには、特に読解に有効な性格をもった論理的思考力を対象にする必要がある。

本研究は、以下に示す目的と方法により、これらの問題の解決を試みたものである。

2. 研究の目的

本研究は、平成19、20年度の2年計画で、現職教員及び教員志望者（主として国語）の批判的読解力（及びその指導力）を速成するための方法を開発し、それにもとづくカリキュラム・教材資料集を作成することを目的とするものである。

3. 研究の方法

研究の具体的手段としては、**Informal Logic**（非形式論理学）の**Negative Approach**（否定的方法）を援用し発展させ、主として現職教員再教育の場で、また従として教員養成の場で、（国語）教員に必要な批判的読解力（及びその指導力）を短期間で効率よく育成するための理論・方法として構築する。なお、「批判的読解力」、**Informal Logic**、**Negative Approach**、「速成」の意味を以下で説明する。

1) **Informal Logic** の **Negative Approach** の援用と「批判的読解力」という用語の採用。

a **Informal Logic**（非形式論理学）は **Formal Logic**（形式論理学）と違い、日常の思考・言語行為を対象とした蓋然的な論理学である。**Formal Logic** は記号論理学として発展し、演繹的論理の形式面を追求した精密な体系を作り上げたが、われわれの日常的な思考力を向上させるにはほとんど役に立たない。こうしたことから、主にアメリカの大学の一般教育の場において、現実に役立つ（論理的）思考力を向上させる目的で **Informal Logic** の研究が盛んになってきた。

b **Informal Logic** の方法は、大きく **Affirmative Approach**（肯定的方法）**Negative Approach**（否定的方法）の二つに分けられる。**Affirmative Approach** は、いか

にして正しく思考するかを研究するやり方であり、これは研究代表者が今までの科研費での研究で採用してきた方法である。これに対し、**Negative Approach** は、思考はどのように誤りうるかを研究する方法である。本研究では、この **Negative Approach** を主たる方法として採用する。その理由は、読解において、そこに示された考えがなぜ正しいかの説明は比較的に容易に行いうるからである（つまり、思考の誤り方を見せることで、正しい思考を裏側から学ばせる）。この **Negative Approach** による **Informal Logic** をカリキュラム化し、ある程度の長さを持った文章を例文として使用することで、他者の言説を正確に理解・分析し、その妥当性を判断・評価する能力を身につけることができる。本研究では、読解において、受動的な活動ではなく、評価を伴った能動的な活動としての性格を強調するため、論理的読解力ではなく、「批判的読解力」という用語を採用することにした（**critical reading** は、**Informal Logic** で標準的に用いられる用語である）。

2) 必要としての「速成」

研究代表者のこれまでの経験から判断すれば、教員再教育に充てられる時間は、一回につき最大で30時間、通常は15時間程度である。したがって、この時間内で、十分な効果をあげられるカリキュラムでなければほとんど実効性をもたない。本研究では、特に短時間の訓練での向上を可能にするカリキュラムの可能性を目指す。

4. 研究成果

本研究の成果を、(1)の「教員講習用テキスト」を中心に、以下の4点に分けて解説する。

(1) 教員講習用テキスト

本テキストは、研究代表者が教員免許状更新講習等で直接に行う訓練のために作成したものであるが、また直接に指導できない教員の自修に供するという目的ももっている。その内容と意義を具体的に示す。

[方法上の前提事項]

本研究の方針は概して「実践的」に傾く。「実践的」とは、研究の内容が、批判的読解の育成に直接かかわることに限定され、それ以外の情報は扱われないということである。本研究は虚偽論（非形式論理学の否定的方法）を利用した研究であり、虚偽論の研究ではない。虚偽論は、研究の方法論上の選択による主たる手立て（**device**）あるいは方略（**strategy**）にとどまる。それゆえ、研究に不要な虚偽論の概説的知識は一切示さない。また、虚偽論で認定されている虚偽の型式を遍く取り上げることもしない。本研究の目的

にとって有用と思われる型式だけが、虚偽論における重要度とは全く関係なしに選択され、純粋に訓練カリキュラムの素材として活用される。

なお、本研究の準備研究として行った研究成果により、「人に訴える議論」、「先決問題要求の虚偽」、を扱った著書（新書）をすでに出版したため、本テキストでは、「多義あるいは曖昧の虚偽」、「藁人形攻撃（主張のすり替え）」、「人に訴える議論（補）」、「性急な一般化」の4型式のみを扱った。講習では、上記著書とテキストを併用する。

[テキストの内容]

0 序章

- 0・1 研究の目的及び方法
- 0・2 用語の解説1－形式論理学と非形式論理学
- 0・3 用語の解説2－肯定的方法と否定的方法
- 0・4 研究の方針

* 序章では、研究の中心的方法である「虚偽論（非形式論理学の否定的方法）」について、「形式論理学」や「非形式論理学の肯定的方法」との関係を明らかにしながら、その学問的性格を概説した。

1 虚偽を生み出す人間の性向について

- 1・1 どちらかの味方になってしまうこと
- 1・2 自分が正しいことを前提としてしまうこと
- 1・3 自分を後に遺そうとすること

* 非形式論理学でいうところの虚偽は、「人間が犯しがちな、様々な思考（論証）上の誤り」と定義できる。ここで重要なのは「犯しがちな」という言葉である。「犯しがちな」ということは、人間が繰り返す、何度も犯すということである。それが一回性の誤りであれば、それは単なる誤りであり、虚偽ではない。それが虚偽の名に値するためには、少なくとも一つの型としてまとめられるほどに、人間にそうした誤りを繰り返す性向が認められなければならない。本章では、虚偽が生み出される原因のいくつかを、人間の本来的な三つの性向に求めた。

2 多義あるいは曖昧の虚偽

- 2・1 本気らしさ(seriousness)の欠如
- 2・2 これは虚偽か?
- 2・3 不寛容の原理
- 2・4 曖昧は虚偽ではない?

* 多義あるいは曖昧の虚偽(equivocation)

とは、議論（論証）中に現れる言葉が複数の意味で使用されることにより、また何を指すのかが判然としないまま用いられることによって、議論に不正を生じさせる虚偽のことである。議論で多用される多義あるいは曖昧の虚偽は、「不寛容の原理」によって説明できる。不寛容の原理とは、相手の議論が複数の意味で理解されるとき、できるだけその議論が誤りとなるように、相手に不利に解釈しようとするものである。ここから、相手の議論中に現れる言葉が多義的であることに乗じ、相手の意図したであろうことを無視して、なるだけそれを不合理で馬鹿げた意味に解釈し、それによって相手の議論全体を葬り去ろうとする—あるいはこちらの主張に有利なように変質させてしまう—ような虚偽が発生する。

3 藁人形攻撃（あるいは主張のすり替え）

- 3・1 相手の主張を歪曲する
- 3・2 いくつかの練習問題
- 3・3 滑りやすい坂と強くなった藁人形
- 3・4 これは虚偽か?
- 3・5 虚偽は自制できるか

* 藁人形攻撃(attack a straw man、あるいは単に straw man)とは、相手の主張を、こちらが反論しやすいように（故意に）歪めて表現する虚偽である。その歪曲には、言葉の言い換え、単純化、誇張、拡張、絶対化、一般化、文脈からの切り離し等の様々な手段が、多くの場合複合されて用いられる。藁人形攻撃は、故意に相手の主張を歪曲した場合に限られるものではない。そのような意図的なものでなくても、不注意から相手の発言を誤解し、それに対して攻撃を仕掛けてしまうということはある。だが、それは何らその論者の「罪」を軽くするものではない。例えば、AとBの二人の人物がいて、BがAにそのような攻撃を仕掛ける時、BはAと根本的に立場が異なっており、相反する主張をもっている場合が多い。すなわち、BはAの議論におかしなところがあるから反論したのではなく、相手が自分とは正反対の主張をもっているがゆえに、最初から反論するつもりでAの文章を読んだのである。Aが自分とは違う主張をもっているのであれば、当然ながらBはAの意見には誤りがあると考え、そうでなければAの意見は正しいことになり、誤っているのは自分の側ということになってしまうからだ。こうして、Aの文章にどうしてもあるはずの誤りを見つけ出そう

とした結果、BはAの意見を、実際よりも愚劣で反論しやすいものに読み違えてしまったのである。議論において、相手の意見を誤解してしまうのは、大抵これが原因である。したがって、それが意図的ではないという理由で、何か無垢な過ちのように許容してやる必要はまったくなく、その「悪意」の程度は、意図的な歪曲といささかも変わるところがない。むしろ、意図的でないことはそれだけ読解力が薄弱ということになり、かえって救いようがないと言える。

4 人に訴える議論(補)

4・1 いくつかの補足的説明

4・2 効果としての人に訴える議論

* 人に訴える議論(argumentum ad hominem)とは、ある人物の議論に対して、その議論の妥当性を問うのではなく、その人物の人格、発言の動機、実際の行動や過去の発言との整合性等を問題にすることで、その議論そのものを否定しようとする虚偽である。人に訴える議論は、直接的に人によって論の価値を毀損しようとするものばかりではない。書いた当人には全くその気はなかったが、論と共に人についての情報が並べられていたため、効果としてそうなってしまったということもありうる。この場合、人に訴える議論が虚偽あるいは詭弁であるとしても、そもそもそれを成り立たせているのは一体誰なのかという疑問が起こってくる。書き手が何ら直接に手を下さなくても、人についての情報を添えるだけで、読み手が勝手にそれを論の評価に使用してくれる。それと言うのも、人と論とは単純に切り離せないからである。虚偽は、人間が繰り返して犯しがちな誤りを型式化したものであるが、人間がその誤りを何度も繰り返すのは、そこに「三分の理」があるからである。人間は、完全に誤りであることを繰り返すほど愚かではない。だから、逆説的であるが、虚偽が虚偽として成立するためには、そこにいくらかの真実を含んでいる必要がある。

5 性急な一般化

5・1 「性急」の判断の難しさ

5・2 この虚偽に危険性はあるか

5・3 逸話的な事例

5・4 偏った標本

* 性急な一般化の虚偽(The fallacy of hasty generalization)とは、少数の、あるいは不適切な事例の観察から、それ

らの事例に見られる性格を、それらを含む母集団全体の性格と推論してしまう虚偽である。性急な一般化の虚偽を紹介する論理学書のほとんどが、人間が、実に他愛もなくこの虚偽に陥ってしまうことを指摘している。これは、われわれ自身の言語生活を省みても納得できる。しかし、虚偽とはその本質において誤りである。そして、それが誤りである以上、それを犯したわれわれは幾分かの不利益を被るはずだ。が、それにもかかわらず、われわれが性懲りもなく何度もこの虚偽を犯すというのであれば、それはわれわれにとってそれほどの不利益には働いてないのではないだろうか。この一般化は、もっぱら人間の集団について、特に悪意的なステレオタイプ(偏見)を形成することが多い。この場合、そうした偏見をもたれた側は迷惑だが、それをもつわれわれは痛くも痒くもない。何よりも、悪意的な偏見であれば、それによってわれわれの行動は防御的になるので、偏見の対象から何らかの害を被ることも少なくなる。例えば、「○国人は親切だ」と思い込んでいた場合には、油断して○国人の一人に心を許し、それによってひどい目に遭うかもしれない。が、「○国人は狡猾だ」との偏見を抱いていたなら、われわれは○国人を決して信用しないであろうから、彼らとの交渉において痛い目を見ることもない。このように、虚偽を犯しても直接の不利益を受けないことが、われわれがこの種の虚偽に陥りやすい理由の一つである。

(2) 一般向け図書(新書)

研究成果を広く社会に発信し、教員以外にも利用していただくため、上記(1)のテキストから材料を借り、一般向け図書として書き直した。(新書・光文社・7月刊行予定)

(3) 生徒指導用テキスト(ワークシート)

上記の教員研修用の訓練(虚偽論を応用した批判的読解力の速成)と類似した訓練を国語教室で行うために、現職教員の協力を得て、生徒用の教材(ワークシート)と指導者用の解説集を作成した。ワークシートのレベルは、以下の4段階に分類した。

初等1・・・小学校中学年用

初等2・・・小学校高学年用

中等1・・・中学校1・2年用

中等2・・・中学校3年、高等学校用

* そのうちの一つを実例として示す。「初等1」用の、「人に訴える議論」を扱ったものである。(宇都宮市立泉が丘小学校教諭

中村ひろみ作成)

【課題文】

この間の給食の時間のことです。

ぼくは、あまりすききらいはないのですが、グリーンピースだけはどうしても食べられません。その日の給食は、野菜の煮物でした。その中には、なんと、ぼくの苦手なグリーンピースがいくつも入っていたのです。ぼくは、しかたなく、一つ一つグリーンピースをよけながら食べていました。

すると、となりの席のけんじ君が、「太郎君、グリーンピース、残しちゃだめだよ。すききらいはいけないんだよ。」と言うのです。ぼくは、思わず、「なんだよ、けんじ君だっこの間さかなを残したじゃないか。人のこと、言えるのかよ。」と言ってしまいました。

自分がすききらいをしている人の言うことなんて、ぼくは聞けません。

【問一】けんじ君の「グリーンピース、残しちゃだめだよ」という意見は、まちがっていますか。

【問二】太郎君は、なぜけんじ君の言うことを聞けないといっているのですか。

【問三】太郎君の考えはまちがっています。それはなぜですか。

【解答と解説】

1 対象 小学校中学年

2 時間 二十分

3 解答

【問一】

正しい(まちがっていない)

* けんじ君の意見自体は間違いではないことをはじめにおさえる。

【問二】

けんじ君がこの間さかなを残したから。

* 太郎君がけんじ君の言葉でなく、行為あるいは人柄を問題としていることを確認する問題である。

【問三】

けんじ君がこの間さかなを残したからといって、太郎君がグリーンピースを残してもいいことにはならない。けんじ君がどんな人であろうと、けんじ君の言っていることは正しいので、太郎君はけんじ君の意見について自分の考えを述べるべきである。

* 人と論は区別して考えるという論理の筋道をおさえる。児童の理解が困難な場合は、図を用いたり例をあげたりして理解を深めさせたい。グループ等で話し合わせるという方法もある。

4 ねらい

人と論を区別して考えるのが筋道の通った考え方である。我々は往々にして論ではなく人物・人格に対して腹を立てたり意見をしたりしてしまう。「人に訴える議論」に対しては、さまざま考え方があるが、ここでは人と論を厳密に分けて考えるという基本をおさえたい。

(4) 研究成果による社会貢献

上記研究成果にもとづき、以下のような社会的活動を行った。

- 1 教員免許状更新予備講習・講師(20・8)
- 2 全国私立中学高等学校国語科研修会・講演講師(20・8)
- 3 宇都宮市立泉が丘小学校校内研修会・講師(20・7・8)
- 4 長岡市三島郡国語教育研究会・講演講師(20・11)

本研究の学術的意義

教員再教育・教員養成・国語教室(小・中・高)での指導を統合したカリキュラムとして、批判的読解力の速成に目的を定めたものは現在まで公表されておらず、本研究においてそれを試みることは、すべての教員養成大学及び教職課程をもつ大学に一つの具体的なモデルを提供するという意義をもつ。

また、本研究は、**Informal Logic**をその基本的枠組みとするだけに、批判的読解力のみならず、一般の論理的思考力の育成にも直接的に寄与できるものである。さらに、**Informal Logic**そのものの研究においても、わが国では、荒木良造『詭弁と其研究』(大正11年)のような古いものを除けば、そのほとんどが翻訳もしくは翻案的な部分的紹介であり、学問的な独自性をもった体系的な叙述ではない。したがって、本研究において、**Informal Logic**の**Negative Approach**を独自の解釈によって理論的に再構築し、それを一書に纏めたことは、国語教育学のみならず、人文系の諸学問にも大きな貢献ができるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 香西秀信、「批判と揚げ足取りの間」、『月

刊 国語教育』(依頼原稿)、Vol.28, No.12、
2009年(1月号)、34-37ページ(三
段組)。

〔学会発表〕(計2件)

(1)香西秀信、「虚偽論を応用した論理的
思考力の育成方法について」、平成20
年度 全国私立中学高等学校・国語科研
修会(講演)、2008年8月1日、ア
ルカディア市ヶ谷。

(2)香西秀信、「虚偽論より見た人間の思考上
の癖について」(シンポジウム:レトリック
の眼で見た世界)、第46回 表現学会 全
国大会、2009年6月7日、山口大学。(発
表予定)

〔図書〕(計1件)

(1)香西秀信、『虚偽論入門(仮題)』、光文社
(光文社新書)、2009年7月刊行予定。
総200ページ(予定)。

〔その他〕

(1)香西秀信、『講習用テキスト』、簡易製本、
2009年7月刊行予定、A4版総97ペー
ジ。

(2)香西秀信編、『生徒指導用 ワークシー
ト』、簡易製本、2009年7月刊行予定、
A4版総40ページ。

(3)香西秀信(インタビュー)、「説得力を高
めるレトリック」、『Insight』、No.87、20
08年、5月号、12-17ページ。(4段
組)

(4)香西秀信(インタビュー)、「反論力講座」、
『「考える技術」の教科書』(DIAMOND ハーバ
ード・ビジネス・レビュー別冊)、2008
年、12月号、87-90ページ。(4段組)

6. 研究組織

(1)研究代表者

香西 秀信(KOZAI HIDENOBU)
宇都宮大学・教育学部・教授
研究者番号:20178213

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

1 池田有紀子(さくら市立喜連川中学校教
諭)

- 2 井上裕一(佐野市立南中学校教頭)
- 3 内田仁志(足利市立南小学校教諭)
- 4 糸川佳寿子(宇都宮市教育委員会)
- 5 砂川博史(栃木市立皆川中学校教諭)
- 6 中村ひろみ(宇都宮市立泉が丘小学校主
幹教諭)
- 7 森健(上三川町立本郷中学校教諭)
- 8 山中勇夫(宇都宮大学教育学部附属小学
校教諭)
- 9 和久井義文(宇都宮市立宝木中学校教
諭)